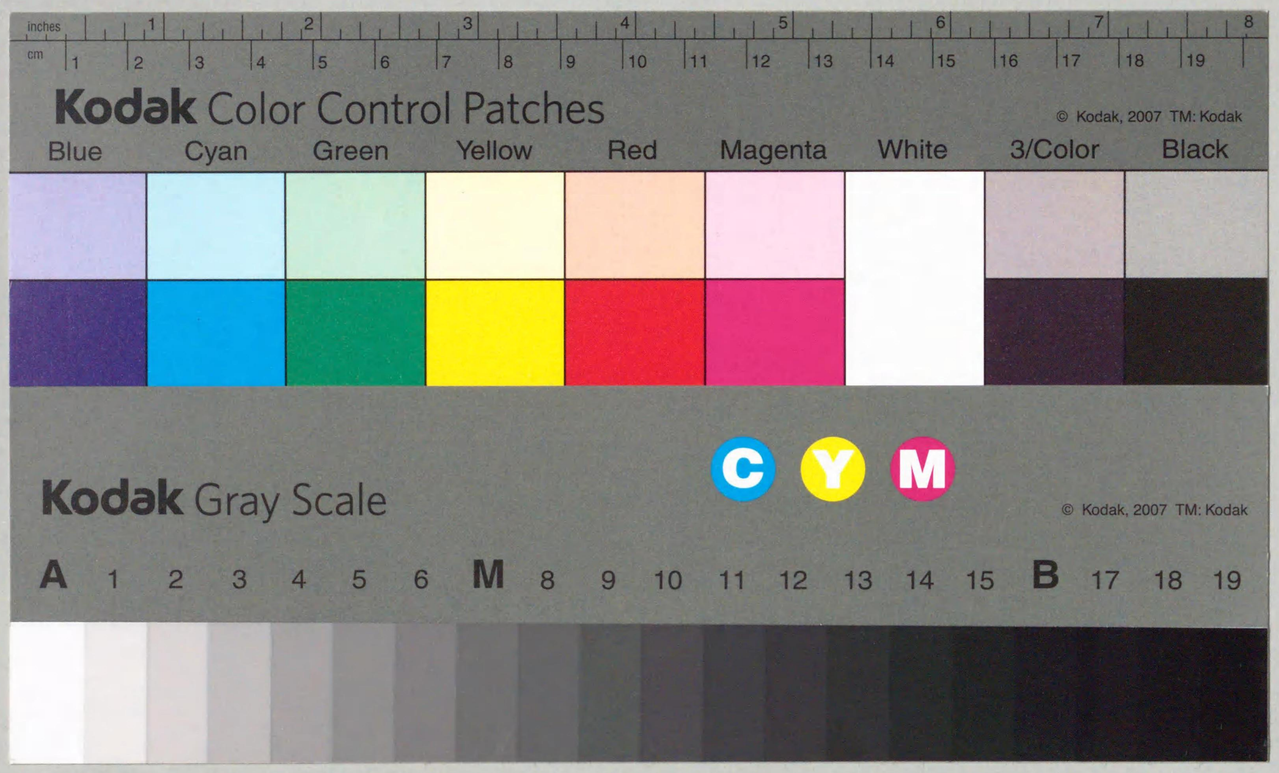
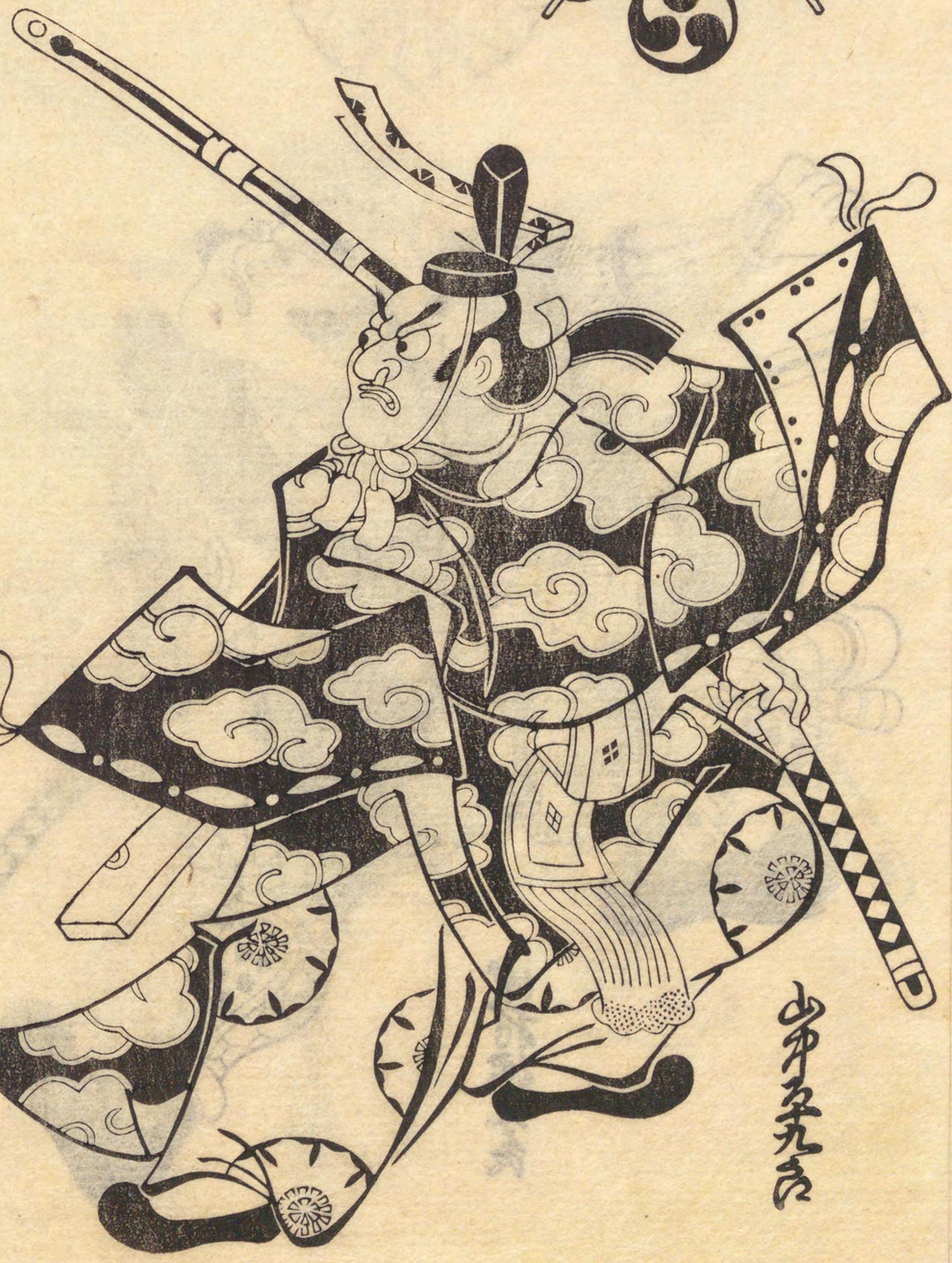


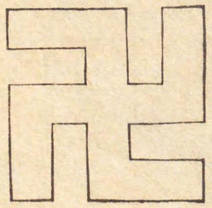
W166
86
93W42959

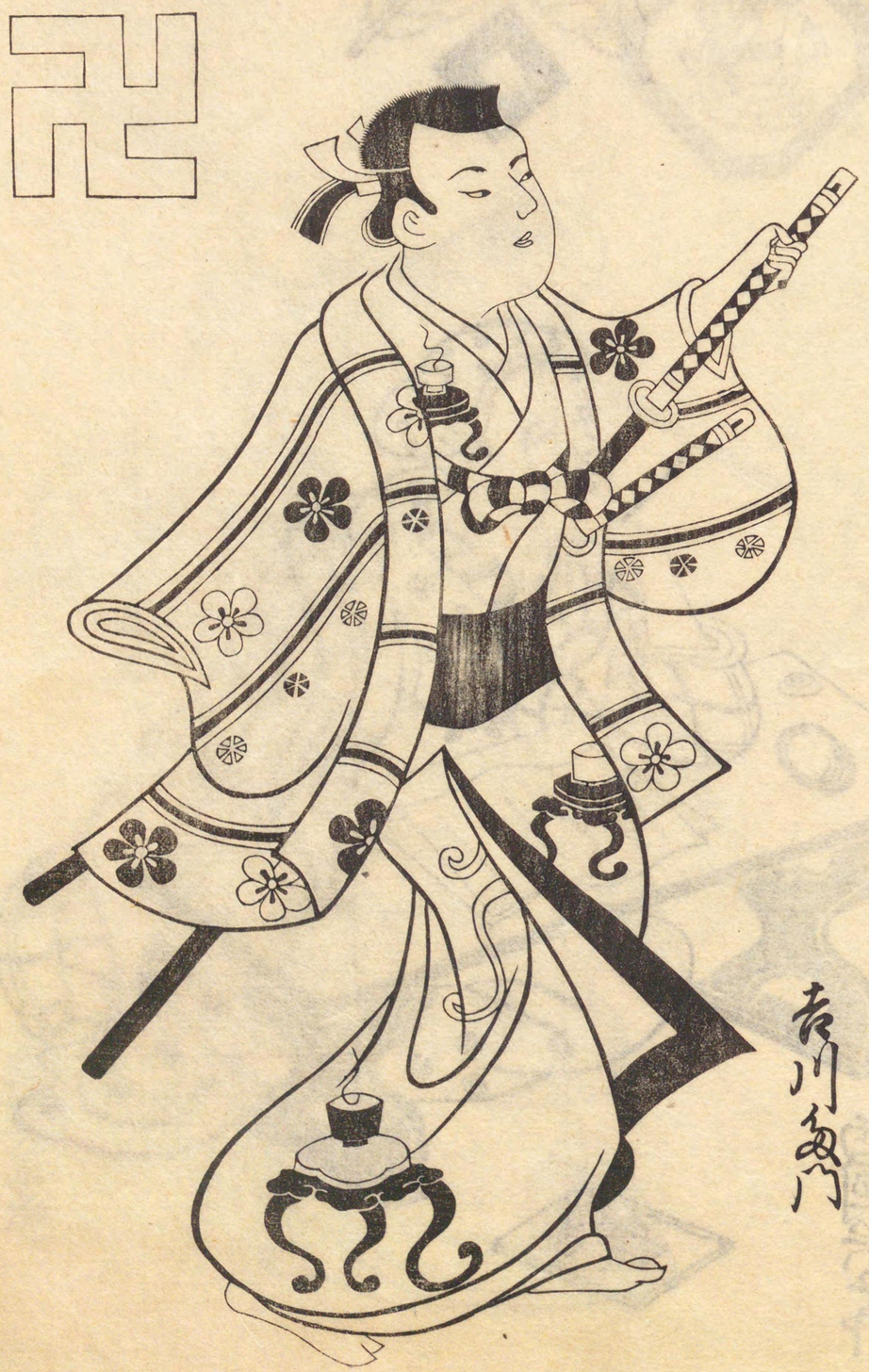
W166
86

國立國會圖書館藏書
5. 8. 25

93W42959







吉川多門

袖景改之物

市川園之照

水木深之助

右之数冊を四方屋風と名付事不滅を以て
此度馬居庄兵衛絵之根元を四方に弘むるを以
則四方屋風と名付侍也若御所望之ハ其ハ四方ハ
堺町通り新泉町絵店迄御尋ニ其ハ不作ハ以上

元禄十三歳辰三月吉日

和泉町板木屋
七郎兵衛板

印行三百部之内
第二四九號

国立国会図書館

稀書複製會々報

第三期
第四回
大十一年十月

第四回配布本解說

風流四方屛風（二册の內）下卷　一册

（原本、三原繁吉氏藏）

本書は元祿十三年卽ち淸信三十七歲の時の作で、當時江戶に於る名優の舞臺姿を描いたものである。上下二册であつた事は、其の序文に由つても知り得られるが、全部の紙數は果して幾枚であつたか、世に現存するものとしては、此れ以上の完本が未だ見出されないのであるから、先づ此本を以て完全に近いものと認めなければならない。

現在の儘では、上卷十一丁（うち序文一丁）、下卷十二丁（うち奥附半丁）、畫面の數は合計四十三圖であるが、其內一人で扮裝を異にした者が四名あるから、俳優名は三十九である。たゞ何處にも丁附が無い爲めに、落丁の有無を確める事が困難であると共に、圖の順序を立てる上に多少考慮を要する。其の方法としては、原本に於ける蠹蝕の痕及び紋章の左右密着したる痕を對照し、少くとも左右一對づつを分離せしめないやうにして、最後にまた蠹蝕の痕を目當に、前後の位置を定めるのである。勿論一册の中に、同一俳優を二圖描いては無かつたであらうから、それを兩册に振分けるのは至當である。

右の方法によると、上卷、下卷の順序は大略左の如きものとなるが、此複製本は、曩に上卷出版の際既に、鳥居家所傳の寫本（原本より摹寫したもの）と對照して、順序を定めたとの事で、遺憾乍ら其處に多少の移動を生ずるに至つたのである。左表上部の丁數は、比較的正確に近いものとは思ふが、尙ほ

姑く訂正の餘地を存して置きたい。

◎順序異同對照表

【上卷】	考定丁數	（複製本）
序	一オ	（一オ）
序	一ウ	（一ウ）
市川團十郎	二オ	（二オ）
岸田小才次	二ウ	（二ウ）
澤村小傳次	三オ	（下四オ）
中村七三郎	三ウ	（四ウ）
山中平九郎（侍）	四オ	（五オ）
西川岡之介	四ウ	（八ウ）
かもん　六三郎	五オ	（九オ）
生島新五郎	五ウ	（下三ウ）
鈴木　平左衞門	六オ	（八オ）
しのつか　庄松	六ウ	（九ウ）
大谷　廣右衞門	七オ	（十オ）
松本小四郎	七ウ	（十ウ）
勝山又五郎	八オ	（六オ）
生島大吉	八ウ	（六ウ）
水木辰之介（狐踊）	九オ	（四オ）
中村勘三郎	九ウ	（三ウ）
岸田小源次	十オ	（下三オ）
横山六郎次	十ウ	（下七ウ）
中村傳九郎（荒武者）	十一オ	（下二オ）
四野宮源八	十一ウ	（十一ウ）
【下卷】		
水木辰之介（槍踊）	一オ	（一オ）
市川團十郎（荒武者）	一ウ	（一ウ）
中村傳九郎（暫）	二オ	（上三オ）
荻野澤之丞	二ウ	（上五ウ）
村山四郎次	三オ	（上七オ）
袖岡政之助	三ウ	（四ウ）
吉川多門	四オ	（五オ）
四野宮平八	四ウ	（上七ウ）
富澤半三郎	五オ	（八オ）
松本兵藏	五ウ	（八ウ）
袖岡村之助	六オ	（九オ）
山中平九郎（惡公卿）	六ウ	（二ウ）

猿若　山左衞門	七オ	（上十一オ）
水木染之助	七ウ	（六ウ）
市川團之丞	八オ	（七オ）
西國兵五郎	八ウ	（五ウ）
上村吉三郎	九オ	（六オ）
若村澤之介	九ウ	（九ウ）
秋田彦四郎	十オ	（十オ）
西村彌平次	十ウ	（十ウ）
山下　小才三郎	十一オ	（十一オ）
桐山政之助	十一ウ	（十一ウ）
袖崎哥流	十二オ	（十二オ）
奥附	十二ウ	（十二ウ）

斯の如く排列して見るときは、只漠然と對照するよりも有意義であり、圖と圖との間に、自づから一つの聯絡のある事が首肯される。

清信の三十歳の作と傳へらるゝ『古今四場居百一首』（元祿六年版）と此れとを比較すれば、其の年間に、彼れの技倆が如何に長足の進歩を遂げたかが明瞭になる。單に技倆が圓熟したばかりでなく、演劇其ものに對する觀察力が非常に深くなつて來た從つて、彼れの藝術に對する信念に、いよ〳〵堅實味を加へて來た趣きが、其の圖上に髣髴として現はれて居る。

彼れは、單なる外形的の描寫に滿足せず、或は正面から、或は側面から、内へ〳〵と進入して、遂に或る核心に觸れ、それを表現する上に、よく役柄の性格を洞察し、所謂大摑みの筆致を以て、ぐん〳〵要領を盡して行つた。彼れの藝術が吾々に與へる感じは、丁度『萬葉集』のそれと同じである、其の意味に於て、彼れは浮世繪師中の巨人であつた。

本書は、種々の點に清信の獨創力が窺はれる、之を版畫史上から見るときは、墨摺繪本としての外に一枚繪として獨立し得るだけの特長を持つて居る、試みに、各圖を個々に分離しても、それ〴〵纏りのつかないものは一圖も無い。遙かに後年に出來た漆繪及び紅繪などに、三枚續きの三枚が揃つても揃はなくても、一枚繪としての生命を個々に持つて居るものがある、それを早くも彼れが先驅者となつて、

斯かる試みを實行した事は、たしかに斯界に於ける一大功績でなければならない。

本書は奥附に見ゆる通り、元祿十三年三月の發行であるが、同年四月には同じ版元によつて、彼れの『娼妓畫牒』（寸錦雜綴所載）が發行された。一方には江戸の俳優を描寫し、一方には吉原の遊女を紹介して、多々益々彼れは名聲を博した。『風流四方屏風』の名は、彼れにとつて好個の記念となつた譯であり今日から想見しても、本書を彼れの出世作とするに十分である。

要するに、本書は繪畫史的に重要視されるばかりでなく、演劇史上からも亦多大の價値を認められるものである。まして、清信を研究するには、十分反復玩味すべき傑作品である。（雨石生）

豐世見久佐　一册　（原本水落京二氏藏）

これは俳人朝鶯軒梅水が、新春の行事を吟咏したる五十句を輯錄して、句毎に畫を添へ其頃の習俗や慣例を畫を以て表現したるものにて開版は天和三年なり。當時の俳壇の狀況及び其風調句格等もこれによりて窺ふに足る。

著者朝鶯軒梅水は如何なる履歷の人にや、『俳家大系圖』をはじめ、其他奇人談、小傳等の數書を漁りたれども見當らず。其系統も傳記も一切不明なり。其句作の調を檢するに、貞德風のなだらかなる趣きも見ゆれども、檀林派の窮屈なる面影も顯著ならざるに非ず。而もなほ遽かに檀林なりとも推斷しがたきものあれば、或は時流かぶれの俳人にして特に何派とも定め難き作家ならんか。なほ識者の垂教を竢つ。畫も其頃の稚趣を具へて、素人離れのせざるところあれば、或は自畫にはあらずやとも疑はる。とにかく著者は、繁劇の務めなどありて、句作にのみ沒頭せし人にてはあらざりしならん。

本書の内容を按ずに、其咏じたるものにして今は廢れたるもあるべく、また名の變りて耳遠くなりしものもあるべく、隨つて句意の解し難きものもあり。それらは暫く措き、（世に知れ渡れる儀式のうちの各種の事始めなどの式目の一定せずして明らかならぬものを省き）、卷中の十餘圖に就いて聊か說明を附すべし。

門松　起源に就いては諸說あれども『大日本文學列傳』によれば、長久四年に校書殿にも試みし由載せたれば、其以前よりのことなるべく、『堀川百首』修理大夫顯季の歌にも「門松をいとなみ立つる其程に春明方に夜やなりぬらん」。

釣の尊　これは若夷なるべし。若夷は京坂奈良あたりに物貰ひがえびすの紙符を賣歩き、元祿前後は最も盛んなり。『俳諧歲時記』にも、若夷の札を市中に賣ることを記し、元祿五年版、西鶴の『胸算用』の序にも「松風靜に初曙の若えびす〳〵」と見え、また同書、奈良の庭爐の條に「夜も明方の元日、俵迎ひを賣りけるは板に押したる大黑なり、二日の曙惠比須迎ひとて賣りける、三日の朝方に毘沙門迎ひとして賣りけり、毎朝三日の間福の神を賣るぞかし。」

具足餠　武家にて軍神を祭る爲に甲冑の前に供する鏡餠なり。十一日にこれを食して祝ふを具足開きといふ。この儀式は古く正月廿日なりしが、寛永九年に二代將軍秀忠の薨去以後十一日となれり。また起源に就いては『湯土問答』によれば、織豐時代なるが如し。民間おかゞみ開きとて、神棚に供したる餠を食するも、具足開きの例に習へるならん。

慈悲の藏　藏開きなり。この藏びらきを慈悲の藏と咏じたるは、天和元年に饑饉あり、餓莩道路に充ち、お救ひ小屋を建てゝ窮民を賑し、翌二年もまた饑饉續きたり。歷史に現はれたる饑饉は崇神天皇の六年を初めとし、天和年間までに大饑饉が數十度あり、施米の制度は行はれたるも、特に救恤舍を設け食を施したることは見えず。然ればお救ひ小屋は此時の創始なるまゝ、世人其恩惠に浴したるより、これを目擊せし著者は、四民の喜びを藏開きに懸けて諷ひしならん。

破魔弓　『和訓栞』に「正月兒童の弄ぶものなり、破魔弓など書けれども、もと濱の輪とて藁にて

輪を作り、これを轉ばして童子に射習はしむ云云」ともあり。これが次第に飾物のごとくなり寛文七年十一月朔日の町觸に「はま弓結構に不致射られ候様可仕候云云」とあれば其變遷を知るべし。また『日本歳時記』の書にも、正月小兒の小弓を射る圖あり、これ破魔弓なり。

玉毬打　ぎつちやうは正月兒童の弄びし武事の遊戯なり。明暦寛文頃の圖には、毬杖の柄に總あり、本書のは總なし。延寶度の圖にも總なきもの見ゆれば、其頃よりして斯くなりしにや。

手鞠　『東鑑』廿六貞應二年の條に、手鞠會のこと見え、古き玩具なれども『骨董集』に云へる如く、其初め詳ならず。鞠も古くはかゞりなし、此圖にはかゞりの飾絲あるなど參考となるべし。

加留多遊び　かるたとは西班牙語なるよし。天正八年英吉利船によつて舶載せしとは、第三期一回の『天和長久四季遊』の解説中にも云へり。松葉屋とあるは、京都の加留多屋の家號なり。圖中人物の手にするものは、俗にいふメクリなり。

初太鼓　芝居なり。古く開場は正月二日なりしも、後には十五日となれり。『男色大鑑』にも「二日のはじまり大鼓の響き渡り」また『總鹿子』にも「元日芝居式三番、見物群集、翁渡しと云、二日初芝居」また安永六年の『江戸大芝居三座年中行事』にも「元日舞臺にて晝時三番叟濟而、仕始めとて色子、子供又は中通り役者まで人々思ひつき狂言あり中暑二日春狂言曾我、初日近頃は大方十五日より始まる」。

萬歳　『三十二番職人歌合』に、千秋萬歳法師とありて「春の庭千秋萬歳祝ふより花の木の根はさし榮えなん」とあり。古くより、初春に京坂より來る。江戸は開府後參河より來る。起原に就て那珂通高の説に據れば、萬歳は踏歌なれば持統天皇の頃よりあり、當時は萬歳樂と呼び、俗に阿良禮走といふとか。

鳥追　『鹽尻』に「萬歳は一宅の祝辭、鳥追は田事の祝ひ、春駒は蠶業の壽きなり、衣食住の三つを重しとして、故に年の初めにこれを壽き興を催し侍るこそ中暑鳥追はいやしき非人體の所作に落ちてしもたねの祭とす」とあり。後に江戸にいふ鳥追とは異なれり。『人倫訓蒙圖彙』にも、乞人與次郎やたゝきの鳥追に出でたるよしを記せり。それも後にはサヽラを摺らず四ツ竹を持てり。

浴せ　これは水祝ひなり。其角の『五元集』に「こなたにも女房もたせん水祝ひ」の句あり。こは正月のはじめ、前年に妻を娶りし男のところへ行き水を浴せるなり。此惡戯の盛んに行はれしことは、本書の刊行されし天和三年十二月廿四日の町觸に「町中にて水あひせ彌以堅仕間敷候婿舅たりとも一切可爲無用事」とあるにも知られぬ。なほそれより七年の後、元祿三年正月五日にも同樣の町觸出でたり。

初めたき　初湯なり。安政年間久須美雋の『浪花の風』に「元日に錢湯も一日休み、二日を初湯とす、故に二日は曉七ツ時前より市中螺など吹いて、わいたわいたと大聲にありきて、湯の沸きたるを觸れ知らす云々」とあるが、天和頃には如何なりけん。圖を見れば、背を洗ひゐるは湯女なるべければ、錢湯風呂の初湯のさまなるべし。また湯殿はじめは、自宅に風呂あるものゝ初湯なるべけれど、畫樣によれば行水するものゝ如し。

謡初め　『一話一言』に林春齋の『兩朝時令』を引き、其始め詳かならず。應永二年正月二日將軍義量（足利五代目）營中に謡初めを行ひ、俗にこれを松囃子といふ、三代目義滿などよりの例ならんと云へり。德川幕府にては天正年間より正月二日に執行せしも、承應三年より正月三日となり、民間には正月四日に行ひしもの多し。

次回刊行豫告

誹諧童子教　中、下　二冊

なほ目下彫刻中のもの左の如し

明暦版江戸圖

獸太平記

七十五日

氷の期日（近松門左衞門作、繪入本）

第三期 既刊書目

第一回　風流四方屏風　上卷　天和長久四季遊

第二回　休息句合

第三回　俳諧童子教　上卷　野　郎　蟲

第四回　風流四方屏風　下卷　豐世見久佐